

どさくさに紛れて、ということか？

「いいと思う」

また直也は走り出した。サッカー小僧の脚力に、すぐに置いていかれる。ちっとは加減しろ、こっちは体育会系じゃあないんだから、息が上がるじゃないか。

少し先で足踏みしながら直也が聞いた。

「しかし、何で、あいつ姉さんにやつあたり？」

「あたしが聞きたいよ」

沙耶さやを捕まえたのは、一階の昇降口だった。

「みんな嫌い」

沙耶はあたしと直也を睨みつけている。くやしいが、そんな顔でもかわいい。

「あたしだけじゃないって」

と、あたしは直也に笑顔を向ける。

「おれは……」

直也がふいに真顔になり、沙耶に向き合う。

「おれは、好きだけど」

「はあ？」

「松浦沙耶のこと」

いい切った直也の顔がにわかに赤くなった。

「よくいった」

あたしは腰に手を当てて、二人を見つめる。

「わけわかんない。みんなで仲間外れにしたくせに」

「だれがおまえのこと、仲間外れにしたかよ」

「だよねえ。浮いてるのがだれかといえば高浜でしょ。あたし、ペアみたいにいわれて迷惑だよ。けどさ、高浜、仲間かもしれないって最近思う。それ、認める」

あたしは沙耶に笑いかける。ほほを膨らませた沙耶は不満顔。でも、もうそれはちゃんと自分のかわいさと他人の目を意識した顔で、あたしはほっとした。

直也の好意は十分わかっていたはず。いいんじゃないかな。美男美女にはほど遠いが、美女と野獣というほどでもない。サッカー小僧は案外硬派だ。

展示は模造紙四枚を使うことになった。一枚目に、原子力発電のしくみを描いた。それは偉生。その下にあたしがおもな放射性物質の種類と半減期の表を作成。ヨウ素131は割と短い、セシウム137は三十年。三十年後は四十五歳。ウラン238は四十五億六千年かけて半分になる。ゼロが多くて気が遠くなる。

「それって、地球の歴史ぐらい？」

偉生よおに聞いてみた。

「いい線いってるよ、姉さん。けど、ゼロ一個足りないよ」と、偉生は模造紙に書かれた表を指さす。

「なぜ、瞬時にゼロの数が判別できる？」

あきれ顔でいった玲美れいみは、別の紙に、太陽光や風力とか